

新潮文庫

宴のあと

三島由紀夫著



新潮社

宴のあと

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

昭和四十四年七月二十日 発行
昭和四十五年二月二十五日 二刷

著 者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

宴のあと

三島由紀夫著

新潮社版

1888

宴^{うたげ}

の

あ

と

第一章 雪後庵

雪後庵は起伏の多い小石川界隈かいわいの高台にあって、幸いに戦災を免かれた。三千坪に及ぶ名高い小堀遠州流こほりえんしゅうりゅうの名園と共に、京都のとある名刹めいさつから移された中ちゅう雀門さくもんも、奈良の古い寺をそのまま移した玄関や客殿も、あとに建てられた大広間も、何一つ損そこなわれていなかった。

戦後の財産税さわぎの只中ただなかに、雪後庵は元の持主の実業家の茶人の手から、美しい元気な女主人の手に渡って、たちまち名高い料理屋になった。

この女主人の名を福沢かづという。かづは豊麗な姿のうちに一脈の野趣があつて、いつも力と情熱にあふれていた。入りくんだ心の動きをする人は、かづの前へ出ると自分の複雑さを恥じ、気力の萎なえた人は、かづを見れば、大そう鼓舞されるか、却かえって打ちのめされるような気になるかした。何か天の恵みによって、男性的な果断と女性的な盲ら滅法の情熱とを一身に兼ねそなえたこういう女は、男よりももっと遠くまで行くことができるのだ。

かづの性格はすみずみまで明るく、決して屈することを知らない自我は、単純な美しい形をしていた。若いころから、愛されることよりも、愛することのほうが好きだった。無邪気な野趣が、多少の押しつけがましさを隠し、周囲のちっぽけな人間のいろんな悪意が、野放図もない

素直な心をますます育てた。

かづには古くから、色恋ぬきの男の友人が何人かあった。保守党の黒幕政治家である永山元亀^{げんき}は、むしろ新らしい友人だったが、二十歳も年下のかづを、妹のように愛していた。

「あいつは稀^{まれ}に見る女傑だよ」といつも言っていた。「あいつは今にえらいことをやるだろう。日本を引っくりかえせといえ、それもやりかねない。男なら風雲児と云われるところを、女だからやり手と云われるくらいですんでしまふ。誰かあいつから本当の色気を引きずりだす男があらわれたら、そのときこそあの女は爆発するだろう」

かづは元亀の言葉を人づてにきくと悪い気がしなかったが、元亀と面と向っては、こんな風と言うのであった。

「永山さんじゃ私の色気なんか引き出せやしませんよ。自信たっぷりで強く来られたって私はだめなんです。あなたは人を見る目は十分お持ちだけれど、口説き方はなっちゃんませんね」

「お前を口説こうとは思わんよ。お前を口説くようになったら、わしもおしまいだね」

と老政治家は憎まれ口をきいた。

雪後庵がはやるにつれて、庭の手入れには十分な費用がかけられた。客殿の中書院から真南に、巽^{たつみ}の池があつて、月見の宴には、この池が庭の大事な点景になった。庭のぐるりは、東京でもめったに見られない古い壮大な樹々に囲まれていた。松や栗^{くり}や榎^{えのき}や椎^{しい}の一本一本がおごそかな姿でそそり立ち、そのあいだにのぞかれる青空には、何ら邪魔な都会の構築物が顔を出していなかった。ひとときわ秀^{ひい}でた松の梢^{こずえ}に、番^{つが}いの鳶^{とび}が久しく住みならえていた。あらゆる種類の鳥が、

折にふれてこの庭を訪れたが、わけでも渡りの時節に、南天桐の実やひろい芝生の虫を啄みに来ていちめん下り立つ鳥の、夥しさとさわがしさは比べるものがなかった。

朝毎にかづは庭を散歩して、その都度、庭師に何かと注意を与えた。注意は当たっているものもあれば、当たっていないのもあった。ただ注意を与えることが日課になっていて、彼女の上機嫌の一部だった。だから老練な庭師も、敢て逆らうことをしなかった。

かづが庭を歩く。これは一人身であることの完全な愉楽で、自由な黙想の機会だった。日もすがらほとんど喋ったり、唄ったりして、一人きりになることがなかったし、客の応接はいくら馴れていても疲労を呼び起した。朝の散歩こそ、もう色恋に大して打ち込む気の起らない心の平静の証しだった。

恋はもう私の生活を擾さない、……かづは靄のかかった木の間からさし入る莊嚴な日ざしが、径のゆくでの緑苔を、あらたかにかがやすのを見ながら、こういう確信にうっとりした。彼女が色恋と離れてしまってからもう久しかった。すでに最後の恋もおい記憶になり、自分があらゆる危険な情念に対して安全だという感じは動かしがたいものになった。

こんな朝の散歩は、かづの安全性の詩だったのである。年は五十あまりだが、美しい肌と輝く目を保った身ぎれいな女が、こうして広い庭の朝をそぞろ歩く風情を見たら、誰しも心を搏たれて、何かの物語を期待するにちがいない。しかし物語は終り、詩は死んだことを、誰よりも知っているのはかづ自身である。もちろんかづは自分の裡の鬱勃たる力を感じている。同時にその力がすでにたわめられ、御せられて、決して羈絆を脱して走り出したりしないことをよく知ってい

る。

この広大な庭と家屋敷、銀行預金と有価証券、有力で寛大な政財界の顧客たち、これらのものはかつの老後を十分に保証していた。ここまで来ればもう人に憎まれたり蔭口を言われたりする心配はない。この社会にしっかりと根を張り、みんなに敬重され、高尚な趣味に憂身をやつし、ゆくゆくは適当な後継を仕立てて、旅行や交際に祝儀袋をまきちらしながら、何不足のない余生をすごすこともできるのだ。

かづはこういう考えが心にひろがって、歩みを滞らせる折ふしには、庭門のほとりの中立の腰掛に腰を下ろし、緑苔の露地の奥深くを眺め、そこにこぼれる朝の日ざしや、下り立つ鳥のこまやかな動きを眺めた。

ここにいと電車の子びきも自動車の警笛もまったくきこえぬ。世界は一幅の静止した絵になった。どうして一度燃え立った情念が跡方もなく消えてしまうのか、かづにはその理由がわからない。自分の身を一度たしかに通り返したものが、どこへ行ってしまったのかわからない。さまざまなものが蓄積されて人間が大をなし、成長してゆくというのは嘘のように思われる。人間とはただ雑多なものが流れて通る暗渠であり、くさぐさの車が轍を残してすぎる四辻の、にすぎないように思われる。暗渠は朽ち、塋はすりへる。しかし一度はそれも祭りの日の四辻であったのだ。

もう永いこと、かづは盲目になった経験がない。何もかもこの庭の朝の眺めのように、明澄に見晴らしが利き、すべてがくっきりとした輪郭を伴ってよく見え、この世にはあいまいなところがない。

一つもない。人の肚はらの中も全部見透みとおしのように思われる。もう愕おどろくべきことも、そんなにたんとはない。人が利害のために友を裏切ったときいても、ありがちなことだと思ひ、女に迷つて事業に失敗したときいても、よくあることだと思ひ。ただ自分がそんな目に会わないことだけは確実なのである。

かづは人から色事の相談をもちかけられると、てきぱきと巧うまい指示を与えた。人間心理は数十の抽斗ひきだしにきちんと分類され、どんな難問にもいくつかの情念の組み合わせだけで答が出た。人生にそれ以上複雑なことは何もなく。それは限られた数の定石から成立ち、彼女は隠退した名棋士で、誰にも的確な忠言を与えることのできる立場にいた。だから当然「時代」を軽蔑けいべつしていた。いくら新らしがったところで、人が昔からの情熱の法則の例外に立つことができようか？「このごろの若い人のやっていることは」とかづはよく言うのだった。「衣裳いしやうがちがうだけで、中味はちっとも昔とかわっていませんよ。若い人は自分にとってはじめての経験を、世間様にもはじめての経験だとしてとりちがえる。どんな無軌道だって昔とおなじで、ただ世間のやかましい目が昔ほどじゃないから、無軌道も大がかりになって、ますます人目につくことをしなくちゃならなくなるんです」

これは実に平板で月並な意見だったが、かづの口から出ると力があつた。

かづは腰掛にかけたまま、袂たもとからとりだした煙草をおいしく喫のんだ。朝の光りに漂うその煙が、風もないので、羽二重のようにつややかに重い。この味わいには、家庭を持った女のきつと知らない、ゆったりした生活の自負そのものの味があつた。前夜どんなに呑み過しても、健康な

かづの体は、かつて煙草を不味く喫んだおぼえがないのである。

ここから見えなくても、庭の全景はかづの心にしっかりと刻み込まれ、隅々までも掌を指すように諳んじている。庭の中心をなす黒々とした緑の巨大な鰍の樹、その光沢のある厚い小さな葉の聚り、裏山の木々にまつわる山葡萄、……そして書院から見た芝生のひろい展望と正面のつましい雪見燈籠、古い五輪塔を置いた中ノ島の夥しい笹。庭のどんな小さな植込みも、どんな小さな花も、偶然に生じたものではない。

……煙草を喫んでいるうちに、この庭の精緻な姿が、かづのいろんな記憶をすっかりおおいつくしてしまふのが感じられる。かづは今やこの庭に対するように、人間や世間に対している。そればかりではない。彼女はそれを所有しているのだった。

第二章 霞弦会

霞弦会の例会を今年からここでひらきたいという相談を、かづは或る大臣から受けた。それはむかしの同期の大使たちのいわばクラス会で、年に一度十一月七日が例会の日であるが、今までいい会場に恵まれていなかったので、大臣が見かねて口をきいたのだ。

「皆さんハイカラな御隠居様だが」と大臣が言った。「一人だけ、どうしても御隠居様になり切らない方がいる。あんたも知ってるだろうが、野口老だよ、むかし大臣を何度もやったあの有名

な。あの方はどういいうわけだか、このごろは革新党の一代議士になって、又それも次には落選してしまわれた」

かづがこの話を受けたのは、大臣主催の園遊会の最中だったので、それ以上ゆっくりきくことができなかった。いつもの小鳥の群とちがって、ひどく大型の色とりどりのやかましい鳥の群が下り立ったように、その日雪後庵の庭は、大ぜいの外人の男女に占められていた。

——十一月七日が近づくにつれて、かづは何やかと心づもりをした。そういう客であるならば、まず敬意を旨としなければならない。今、世に時めいている人たちは、無礼な冗談や狎れすぎた振舞をもむしろ面白がるが、かつて世に栄えて隠棲している人たちにとっては、同じ冗談も矜りを傷つけられる種子になるのだ。そんな老人相手には、ひたすら聴き役にまわるに限る。そして柔らかな会話で按摩をし、むかしの権力がふたたびその座に花やいでいるような錯覚を起させるのだ。

その日の雪後庵の献立は次のようであった。

汁 松露、胡麻豆腐、白味噌

作 烏賊細作り、防風、橙酢

鉢 赤貝、青唐、橙酢、出汁

八寸 鵜附焼、伊勢海老、貝柱、千枚漬、甘草芽

煮 相鴨、筍、葛飴かけ

鉢肴 鯉二尾、甘鯛塩焼、橙酢

碗わん ぜんまい、栗餅あわもち、梅干

かつは藤鼠ふじねずの江戸小紋の着物に、古代紫地に菊花菱きくはなびしの一本独鈷いっぽんどうこの帯を締め、錆朱さびしゆの帯留に大粒の黒真珠をつけた。こういう着物の選び方は、豊かな体を引きしめて、すっきりと見せるのに役立った。

その日は暖かく晴れた日だったが、暮れてまだ月も出ないころに、野口雄賢ゆうけん元外相と、環久友元ドイツ大使が連れ立ってあらわれた。立派な恰幅かつぶくの環に比べると、野口は痩やせてやや貧相に見えた。しかし銀髪の下の目は鋭く澄み、おいおい集まるヨーロッパの元大使たちの客のなかで、彼一人が隠居ではないという理由は、このまことに理想家肌はだの目のかがやきからもかづにはわかった。

この席は賑にぎやかで社交的だったが、話題はすべて過去に関かわっていた。一等お喋りしやべなのは環だった。

座敷は客殿の中書院で、環は黒漆塗の華頭窓かうとうまどと華麗な絵襖えふすまとの堺さかいの柱によりかかっていた。襖には極彩色で番つがいの孔雀くじやうと白牡丹しろぼたんが描かれ、その背景には南画風の山水が描かれて、大名趣味の奇妙な様式の混淆こんこうを見せていた。

環はロンドン仕立の服を着、今時めったに見ない金鎖の懷中時計を、チョッキのポケットに納めていた。それはやはりドイツ大使であった彼の父が、カイゼル・ウィルヘルム二世から賜わった品で、ヒットラー時代のドイツでも、この時計が大いに幅を利きかしたのである。

環は美男で、弁舌さわやかで、下情に通じていることを矜きんりにしている貴族的な外交官だった。

が、今では彼の関心は、まったく現代から超絶していた。彼には五百人も千人も集まるレセプションの、かつての日のシャンデリヤの輝きしか念頭になかったのだ。

「いや思い出すたびにひやりとする。こりゃあ実に面白い話なんだ」と、環が殿様風の興褪めな前置きをした。「ベルリンの地下鉄に、大使になってから一度も乗ったことがないというので、参事官の松山君がむりやり私を引張って行って乗せたことがある。うしろから二輛目、いや三輛目だったかしらん。私たちが乗ると、中っ位の混み方でね、ふと前を見たら、ゲーリングがいる」

ここで環は聴手の反響をうかがったが、誰も何十ぺんとなく聴かされている話らしく、何の反響もない。かづが引取ってこう合槌あいつちを打った。

「まあ当時のお偉方でしょう。日本でいえば、加藤清正みたいな。それが地下鉄に乗ってたんでございますか」

「そうだと、当時飛ぶ鳥落すゲーリングがだよ、よれよれの労働者の服を着て、十六七のそれはきれいな小柄な娘の胴に腕をまわして、すまして地下鉄に乗っているじゃないか。私は人ちがいかなと思って目をこすってみたが、どう見たってゲーリングその人だ。何しろ私は毎日のように宴会で顔を合わしている仲なんだからね。却かえって私のほうがドギマギしたが、向うは君、平然たるものだ。女もひょっとしたら娼婦しょうふじゃないかと思うが、私は残念なことにそのほうは疎うとくてね」

「そうお見えになりません」

「実に可愛い娘だが、お化粧が、この口紅なんかも妙に濃いのだね。労働者のゲーリングは、すましてその娘の耳たぶをいじくったり、背中を撫でたりしている。そばを見ると、松山君も目を丸くしていたが、二駅ほど先でゲーリング君は女と一緒に下りてしまった。……さア残ったわれわれはふしぎで仕様がな。それから地下鉄のゲーリングが頭にこびりついて離れんのだね。明る晩にゲーリングの夜会がある。私と松山君はそばへ寄って、つらつら眺めた。やはりきのうの男と寸分もちがわない。

とうとう私は好奇心を抑えきれなくなって、思わず大使の職分を忘れて、こうきいたんだよ。『きのうわれわれは民情視察のために地下鉄に乗った。実に有益だと思うが、貴下はそういうことをされるか？』

するとゲーリングはニヤリとして、意味深長な返事をしたよ。

『われわれはいつも民衆と共にあり、民衆の一員である。だから私は強いて地下鉄に乗ることもないのだ』と

環元ドイツ大使は、このゲーリングの返事を簡明なドイツ語で言い、ついですぐに日本語をつけたのだった。

大使たちは見かけによらず非外交的で、てんで人の話などきいてはいなかった。環大使の話のおわるのを待ちかねるようにして、元スペイン大使が、ドミニカ公使時代に送った美しい首都サント・ドミンゴの生活を語り出した。椰子の林の下、海ぞいの散歩道、カリブ海の壮麗な夕焼け、この夕焼けに映える混血娘の浅黒い肌、……こういうものを、老人は丹念に描写して我を忘

れていたが、又お喋りの環大使が横から話を奪って、若いころのディートリッヒに会った話へ持って行った。環にとつては無名の美人などは何の値打もなく、第一流の名前、金ぴかの名声だけが、話の彩りに必要なものであった。

かづには、客たちの会話に各種の外国語が乱れ飛び、とりわけ猥談の大事な最後の一行がいつも原語で語られるのが気色が悪かったが、めったにこの店に現われない外交畑の人の空気には興味を持った。みんなたしかに「ハイカラな御隠居様」で、たとえ今は貧乏でも、かつて本当の豪奢というものに一度は指で触ったことのある連中だった。そしてそういう記憶は、悲しいことに、一生その指を金粉で染めるのである。

野口雄賢だけが中で異彩を放っている。その雄々しい顔には、いつまでも失われない素朴さがあり、身なりも他の人たちとちがって、衒いや洒落気というものがなかった。鋭い澄んだ目の上には、筆勢の余ったような形の眉が突っ走っており、こんな立派な一つ一つの造作も、おののがいがみ合って、瘦せた体つきと一そうの不調和を示していた。それに野口は微笑を忘れなかったが、いつも自分を守っているしるしに、稀にしか合槌を打たなかった。こんな特色はいやでもかづの目に触れたが、それより初対面で逸早くかづの目についたのは、ワイシャツの襟のうしろにかすかな汚れが、薄い影のようにいついていることであつた。

『元大臣でもある方が、こんなワイシャツをお召しだ。お世話する方がないのかしら』

それから気になったので、ほかのお客の衿元へもそれとなく目をやった。お洒落な老人たちの衿はみな白くかがやき、枯れた皮膚をむざんに締めつけていた。